14

世界文学全集

デイヴィッド・コパフィールド〈3〉炉ばたのこおろぎ

ディケンズ／中野好夫・村岡花子訳

世界文学全集　14

デイヴィッド・コパフィールドⅢ／炉ばたのこおろぎ

ディケンズ

訳者　中野好夫／村岡花子

発行／1971年6月30日　7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／凸版印刷株式会社　製本所／大口製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／日本紙パルプ商事株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニック株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1971

目次

デイヴィッド・コパフィールド 5
第四三章 ふたたび回想 …… 5
第四四章 新しい家庭 …… 14
第四五章 ディック、伯母の予言を果たす …… 34
第四六章 消息 …… 55
第四七章 マーサ …… 74
第四八章 家庭 …… 89
第四九章 謎 …… 104
第五〇章 ペゴティーの夢、みのる …… 120
第五一章 ふたたび、長旅のはじまり …… 134
第五二章 爆発 …… 159
第五三章 もう一度、回想 …… 190
第五四章 ミスタ・ミコーバーの取引き …… 196
第五五章 あらし …… 217
第五六章 新しい傷、古い傷 …… 232
第五七章 移民たち …… 240
第五八章 外遊 …… 254
第五九章 帰国 …… 262
第六〇章 アグニス …… 283
第六一章 悔い改めた二人 …… 295
第六二章 希望の光 …… 311
第六三章 訪問者 …… 323
第六四章 最後の回想 …… 333

*

炉ばたのこおろぎ 339

The Personal History of David Copperfield

The Cricket on the Hearth

by

Charles Dickens

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

デイヴィッド・コパフィールド

（Ⅲ）

第四三章　ふたたび回想

さて、私の一生でも一ばん印象深い一時期について、ここでもう一度ふりかえってみようと思う。それには、まず一歩外に立って、私の影に寄り添いながら、ぼんやり過ぎて行く、それらの日々の幻どもを、もう一度よく眺めてみたい。

週が、月が、そして四季が、音もなく動いて行く。まるでそれらは、暑い夏の一日、そして寒い冬の一夜のように思える。ドーラと一緒に散歩したあの広場が、金色の日射しも明るい、満目花ざかりの広野かと思えば、たちまち、雪に蔽われて、見えないヘザー（訳注　ヒースとも呼ばれる イギリスの野に多い小灌木）の茂み、そして丘になる。いまあの日曜日の散歩道に、夏の陽光を浴びてきらきら流れていた河かと見れば、たちまち朔風にはげしく波立ち、氷の破片さえ漂わせて流れ下る蕭条たる冬の河になる。どんな早い流れよりも、もっと迅速に、たちまち輝き、たちまち暗くなり、はげしく海へと流れ下って行くのである。

あの小鳥のような伯母たちの家、そこでは、一抹の変化も起こっていない。暖炉の上では、相変わらず時計が秒を刻んでいるし、玄関広間には、晴雨計がかかっている。時計も、晴雨計も、正しく動いていることは、たえてないのだが、みんな誰も、心からそれを信じている。

法律上では、私も大人になった。立派に二十一になったのである。だが、それは、いわば誰にも押しつけられる立派さであり、では、私自身、果たして何をしたか、それからまず考えてみよう。

あの面倒な速記術の秘訣も、なんとか身につけた。おかげで、相当の収入になる。速記術関係の各方面では、私の腕は高く評価され、ほかに十一人の仲間と一緒に、議会における討論を、ある朝刊紙のために報道することになった。毎晩毎晩、私は、決して実現しない見通しや、決して実行されない政見や、はたまた、ただ畑にまくためだけに述べられる説明などを、せっせと書き取るのだ。不幸な美女ブリタニア（訳注　イギリスの古名。女性名詞なるために女性に擬人化した）は、まるであの鶏の丸焼きみたいに、役

所の鵞ペンという焼き串で串刺しにされ、さらに官僚主義という赤い紐で、手足もろとも縛り上げられて、いつも眼の前に横たわっている。私は、政界裏面というのにも相当に通じて、政治の意味については、十分に知った。政治については、完全な異端者であり、まず改宗の見込みは永久にない。

トラドルズ君も、同じ速記をやってみたが、これはもう彼の任でない。もっとも、その失敗については、まことに呑気で、なんともわれながらのろまだと自分で言う。彼もときどき、同じ新聞の仕事をすることがあるが、それはただ事実を書き取るだけで、それを記事にしたり、文飾したりするのは、すべてもっと想像力豊かな記者の役目だった。彼は、弁護士試験にも通った。そして、まことに感心に値いする勤勉と克己とで、なんと別に百ポンドを溜めこみ、勤めている事務所の譲渡証書作成人に、礼金として払った。いよいよ弁護士として登録された日のことを聞くと、なんでもよほど強いポート・ワインを、どっさり持ち込んで飲んだそうで、その金高から考えてみると、法学院の方は、けっこう得になったらしい。

私はまた、別の方面でも世の中に出た。というのは、おそるおそる、びくびくもので、創作の方に手を出してみた。内証で、ちょっとした短いものを書き、ある雑誌社に送ってみたのだ。ところが、それが雑誌にのった。以来、みんな短いものだが、書きものの方に専心するようになり、いまでは、きまって稿料ももらえるようになった。概していえば、相当に懐工合はよく、かりに収入を左手の指で勘定するとすれば、いま中指を過ぎて、薬指のまず中程まできたというところだろうか。（訳注　年収三五〇ポンドのこと）

家もバキンガム・ストリートから引っ越して、いまは、かつてあのはじめて感激に酔ったとき見た、気持ちよい家に住んでいる。但し、伯母は（彼女は、例のドーヴァの家を、たいへん儲けて売ったのである）、いつまでもこの家にいる気はないようで、どこか近くの、もう少し小さな家へ越したいと言っている。どういうことなのだろうか？　私の結婚というためかしら？　そうだ、そうにちがいない！

そうだ！　私も、いよいよドーラと結婚することになっている。ミス・ラヴィニアも、ミス・クラリッサも、承知してくれたのだ。そして、もし二羽のカナリアが、羽ばたき騒ぐというなれば、いまの二人が、ま

さしくそれだった。まずミス・ラヴィニアは、ドーラの衣裳箪笥方の世話を、すっかり自分で買って出て、朝から晩まで、ハトロン紙で胴の型紙を切り抜いている。そして、いつも細長い包みと、ヤード尺を小脇にかかえている若い紳士気取りの生地屋とは、どうも意見が合わないのである。いつも胸に、糸を通した針を刺している女裁縫師が一人、ずっと家に泊まり込みで、まるで飲み食いするにも、眠るにも、決して指抜きを取らないのではないかとさえ思えた。まるでドーラの人体模型でもこさえているみたいだった。何度となく、彼女を呼びにきては、なにかを着せてみるのである。夜など、五分間と楽しく話し合っている暇はなかった。すぐと誰か邪魔者の女がきて、ドアをノックする、そして、「ねえ、お嬢さま、ちょっとお二階へいらして下さいません？」なのだった。

ミス・クラリッサと伯母とは、ロンドンじゅうを歩きまわり、家具類をめっけてきては、ドーラと私に見させるのである。むしろこんな実見などいう面倒なことは抜きにして、さっさと二人で、買ってしまったらよかろうにとも思える。というのは、私たち、台所の炉囲いや肉焼き器などを見に行くと、ドーラの方では、まるで見当ちがいのジップの小屋——屋根に鈴がついて、シナ風にできている家などを見つけて、その方を買ってしまうからである。が、さて買ってみても、ジップがその新しい住居になれるまでには、ずいぶんかかった。出入りするごとに、いっせいに鈴が鳴り出すので、彼の方が、すっかり驚いてしまうのである。

ペゴティーも手伝いにきてくれて、さっそく仕事にかかった。彼女の受け持ちは、とにかくなんでも、丹念に磨き上げることらしい。なるほど、なんでも擦ること、擦ること、しまいには擦り抜いて、まるで自分の前額のように、光り出すのだった。また、そういえば、彼女の兄が、夜になると、ひとり暗い街々を歩きまわって、ぶらぶら歩く人たちの顔を、のぞきこんで行くのを見るようになるのも、そのころである。なにしろ時刻が時刻なので、私は一度も声をかけなかった。だが、ひとりむっつりとした彼の姿が通りすぎるとき、彼がなにを探しているのか、またなにを怖れているのか、私には、わかりすぎるほどよくわかる。

その午後、トラドルズが、民法博士会館へ私を訪ねてきたとき（暇があると、ときどき、私もまだ行っていたのである）、なぜ彼は、あんな悲壮な顔をしてい

たのだろう？　私の子どもらしい白日夢は、いまやもうすぐ実現しようとしている。私は、結婚許可状をとるばかりなのだ。

ほんのちょっとした書類だが、効果は、けだし絶大である。私の机に置いてあるのを見、トラドルズは、半ば感に堪えぬかのように、また、半ばはなにかを怖れるかのように、じっと見つめる。かつては夢にまで見た嬉しい関係、その関係において、デイヴィッド・コパフィールド、そしてドーラ・スペンロウと並べて名前が書いてある。そして隅の方には、いわば親代わりの役所として、印紙局の名が見える。人事さまざまな関係に、思いやり深く介入して、私などの結婚にしても、ちゃんと上から見てくれている役所である。またカンタベリー大司教という文字も見える。印刷した文字だけで、私たちを祝福してくれるという、いわば考えられるかぎりの安直さで、祝ってくれているのである。

とはいうものの、私は、嬉しいながらも、なにか落ち着かぬ、あわただしい夢見心地だ。なにかほんとうのような気がしない。そのくせ一方では、道で会う人のひとりひとりまでが、明後日は私が結婚することを、ちゃんと知っていてくれるような気がしてならぬ。宣誓をしに行くと、監督代理までが私を知っており、まるで私たちの間には、なにか秘密結社めいた諒解でもあるかのように、簡単にさっさと片づけてくれる。トラドルズには別に用はないが、これは一般後見人として同行してもらったのだ。

「君も、こんどここへくるときには、きっと君自身の同じ用件だろうね。それも早いといいねえ」私はトラドルズに言う。

「ご好意ありがとう、コパフィールド、ぼくもそう思ってるんだがね。まあ、いつまでも待つと言ってくれるんで、ほんとに嬉しいんだが、それに、実にいい気立ての娘さんなんでね――」

「ところで、何時に乗合へ迎えに行くの？」

「七時さ」トラドルズは、野暮な古い銀時計を見て言う――そうだ、あの塾にいたころ、水車をつくるのだといって、彼が歯車を一つとってしまったあの時計だ。「ちょうどミス・ウィックフィールドも、同じころ見えるんじゃない？」

「いや、ちょっと早いようだね。ミス・アグニスは八時半だそうだからね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「ほんとに、君、こんなめでたい結果になろうとは、なんとも実に嬉しいねえ、まるでぼく自身が結婚するみたいだな。それにまた、そのおめでたい席に、わざわざソフィーまで招んでくれて、ミス・ウィックフィールドと一緒に介添役をさせてもらうなんて、その友情、思いやり、実際なんといってお礼を言っていいか、いや、君の好意は身にしみて感じているよ」

私は彼の言葉を聞く、そして握手をする。またそれからも、いろいろ話をし、一緒に散歩して、食事などをする。だが、どうにもほんとうという気がしない。まるで夢でも見ているようなのだ。

そのうちソフィーが、時間通りに伯母たちの家へ着く。これがまた感じのいい顔で——そう、絶対の美人とはいわないが、なんともいえず気持ちがいいのだ——少なくとも私の見たかぎり、もっとも気取りのない、もっともやさしくて、感じのいいお嬢さんの一人だ。トラドルズは、得意そうに私たちに紹介する。まるで頭じゅうの毛を逆立てて、嬉しそうに、きっかり十分間も揉み手をつづけている。私は、彼を隅の方へ呼んで、ほんとにいいお嬢さんを選んだものだと、心から祝福してやる。

アグニスは、私がカンタベリー乗合まで迎えに行って、連れてきた。これで、ふたたび、あの明るい美しい顔が、私たちと一緒になる。彼女はトラドルズが大好きなので、いまその二人が会い、彼が得意満面で、その世界一の娘さんとやらを彼女に引き合わせている図は、なんともいえぬすばらしいものだった。

だが、それにしても、まだ本当という気がしない。みんな楽しい一晩を過ごし、まるで幸福に酔ってでもいるような気持ちなのだが、それでいて、まだ夢のような気がする。なんとも落ち着けないのである。ほんとにそんな幸福が来ているのか、どうもはっきり感じがこない。なにか霧の中でも歩いているような頼りない気持ち。まるで一、二週間も前に、朝早く眼を覚まし、以来一睡もしていないといったような気持ちなのだ。いつ昨日だったのか、それすらはっきりわからない。ポケットにはいった許可状一つにしても、もう何カ月となく、そのまま持ちまわっているような気がする。

翌日も、みんなして家——私たち、つまり、ドーラと私との家なのだ——を見に行ったが、どうもまだ自分がその主人であるような気がしない。誰か他人の許

しをえて、そこにいるような気がする。いまにも本当の主人が帰ってきて、よくいらっしゃいました、と言われそうな気がするのだ。それにしても、小ぢんまりした、美しい家だった。なにもかも新しくて、きれいで、カーペットの花模様は、まるでいま摘んできたようであり、壁紙の緑の葉は、芽を吹いたばかりのように見える。汚点一つないモスリンのカーテン、ほんのりばら色に匂う家具類、それにあの青いリボンのついたドーラの庭帽子——そういえば、はじめて会ったとき、やはりそんなのをかぶっており、なんとその可愛かったこと！——それも、ちゃんともう帽子掛けにかかっている。ギターの箱も、隅の方にゆっくり立てかけてあり、仏塔風になったジップの家はこれはまたこの家には大きすぎて、みんな必ずぶつかってゆく。

　またしても楽しい晩、相変わらず夢のような気持ち。帰る前に、そっといつもの部屋へ行く。ドーラはいない。まだ着つけの練習がすまないのだろう。ミス・ラヴィニアが、ちょっと顔を出して、もうすぐ来ますからね、と妙に曖昧な言い方をする。だが、なかなか現われない。そのうち、扉口の方に衣ずれの音がして、誰かコツコツとドアを叩く。

「おはいり！」と答えたが、またしても叩く。

　誰だろうと思って立って行くと、果たしてあの明るい瞳と、ほんのりと赤い顔——ドーラの眼と、そして顔だ。帽子やなにかまで、すっかりミス・ラヴィニアが明日の装束をさせて、私に見せによこしたのである。私は、可愛い妻をしっかと抱き締める。帽子がつぶれやしないかと、ミス・ラヴィニアが頓狂な声をあげる。私が喜ぶのを見て、ドーラは笑うやら、泣くやら。それでも、私は、いよいよ夢みたいな気持ちになってくる。

「どう、きれい？」とドーラが訊く。

　きれい！　もちろん、きれいに決まっている。

「ねえ、ほんとに、愛して下さる？」

　話すたびに、帽子の方が危くなって仕方がなく、またミス・ラヴィニアが大声をあげる。そして、今日はただ見るだけのこと、決して手を触れてはいけないのだ、と言い出した。そこでドーラは、嬉しそうに、一、二分ばかりも、もじもじしながら立って、じっと眺められている。それから帽子を脱ぐと——なんとその方が自然なことか！——そのまま手に持って駆け出してしまう。だが、またすぐ普段服に着かえて、小踊

りするように降りてくると、こんどはジップに向かって、どう、ずいぶんきれいなお嫁さんでしょう？　という。そして、ねえ、堪忍してくれる、お嫁さんになったりして？　と言いながら、膝をつき、例の料理の本の上で、いわば独身生活最後のチンチンをやらせるのだった。

私は、いよいよもって夢見心地で、すぐ近くの宿へ帰る。そして翌朝は早く起きて、ハイゲートまで馬車で伯母を迎えに行く。

私は、こんな正装をした伯母を見たことがない。薄紫の絹服を着け、真っ白の帽子をかぶったところは、なんとも実にすばらしい。着つけはジャネットがしたらしく、待っていて、私にも会ってくれた。ペゴティーは、二階席から式を見るつもりらしく、もうはや教会へ出かけるところだ。聖壇で、花嫁を私の手に渡す役のミスタ・ディックは、髪までちゃんと縮らせている。約束通り、通関の門でトラドルズを拾ってやったが、これも鮮やかなクリーム色と淡紺を配した一帳羅の服装で、ミスタ・ディックとともに、まるで全身手袋になったかと思えるほど、白手袋が目立つ。

こんなことがわかっている以上、見ていたはずにちがいないが、そこがぼーっとしていた加減か、なんにも目にはいっている気がしないのである。おまけに、なにもかも嘘のような気がしてくるのだ。だが、それでも幌なし馬車で送られていると、さすがにこのお伽話めいた結婚も、やはり多少は実感が湧いてくるもので、まったく関係なく、店を掃いたり、一日の仕事に出かけて行く気の毒な人たちなどを見ていると、なにか不思議なような同情さえこみ上げてくるのだった。

伯母は、途中じっと私の手を握ったまま坐っている。教会のすぐ手前で車を停め、馭者席のペゴティーをおろしてやったが、彼女は、ぎゅっとそれを握り締めて、私にキスをしてくれる。

「トロット坊っちゃま、ほんとにおめでとうございます！　実の子だって、こんなに可愛いでしょうかしらねえ？　それだけに、今朝は、お可哀そうなあのお母さまのことが思い出されまして」

「そうだよ、ぼくもだよ。それに、ほんとにいろいろと、伯母さまにもお世話になりましたねえ」

「いいのよ、そんなこと！」と伯母がいう。そして溢れるばかりの心をこめて、トラドルズに手を差し伸べる。と、彼がまたミスタ・ディックに、ミスタ・ディ

ックがまた私に、そしてまた私はトラドルズに、といった工合で、とうとう私たちは教会へ着く。

たしかに、教会の中は静まり返っている。だが、私にとっては、まるで蒸気機関が全力運転しているようなもので、とても心を静めてくれる役になど立たぬ。それほどもう興奮しきっているのである。

あとはすべて、なにがなんだかわからない、夢のような気持ちだった。

ドーラを連れて、先方の人たちがみんなはいってくる。座席案内係が、練兵係の軍曹みたいに、私たちを聖壇の手すりの前に並ばせる。だが、そのときになっても、私はまだ、それにしても座席案内係というのは、どうしてこう選りに選った無愛想な女ばかり置くのだろうか？　また教会の儀式には、一切はしゃいだ気分などはいけないので、それであんな苦虫嚙みつぶしたような人間を、わざわざ天国への通路に置くのだろうか？　等々と、そんなことばかり、夢見るような心地で考えつづけているのだった。

やがて牧師と役僧が現われる。船乗りらしいのが数人と、そのほかいろんな人が、ばらばらとはいってくる。私の背後にいる老人の船乗りが、しきりに強いラム酒の臭いを教会じゅうに発散させる。低い太い声で式がはじまる。私たちは、いっせいに緊張する——だが、それもみんな夢心地の中だ。

半ば介添役の手伝いを買って出ているミス・ラヴィニアが、一ばんに泣き出す。（多分）、死んだピジャーを偲んでの忍び泣きだ。ミス・クラリッサは、気つけ薬を鼻に当てている。アグニスは、ドーラの世話をしてやっているし、伯母は伯母で、もう涙が頬をこぼれているにもかかわらず、強いてしゃちこばって謹厳に構えている。ドーラにいたっては、全身ぶるぶるふるえながら、蚊の鳴くような声で、牧師の言葉に唱和している。

私たちは、並んで膝まずく。ドーラのふるえは、だんだんとまったようだが、まだ手はしっかりとアグニスの手を握っている。式は静かに、そして荘重に進む。いよいよ終わると、みんな四月の陽気のように、じっと泣き笑いでお互い顔を見合わす。ドーラは、法衣室でヒステリーのようになり、しきりに、パパ、パパと泣き叫ぶ。

だが、それもすぐ元気になり、みんな登録簿に署名する。私は二階席へ行って、ペゴティーを連れてく

る。一緒に署名してもらうためだ。ペゴティーは、私を隅の方へ連れて行って、しっかり抱き締めると、わたしは、お母さまの結婚式も見せていただきましてねえ、という。いよいよ、それもすんで、みんな家路につく。

私は、誇らかに、そしてまた愛情をこめて、ドーラを支えるようにして側廊を退って行く。人々の姿も、説教壇も、墓碑も、座席も、洗礼盤も、オルガンも、教会の窓も、すべて靄の中を行くようで、ぼーっとしてよく見えない。ただ遠い昔、子どものころ通った教会のことだけが、かすかな連想になって浮かぶだけだ。

通って行くとき、なんて若い夫婦だろう！　そしてまた、なんてきれいな、可愛らしい花嫁！　等々という人々の囁きだけが耳にはいる。馬車での帰り途は、みんなすっかり楽しくなって、しゃべりつづける。結婚許可状は、トラドルズに預けてあったのだが、返してくれというと、ソフィーが驚いて、気も遠くなるばかりだったという。いずれこの人のことだから、きっと失くすか、すりにでも盗られるにちがいないと思っていたからだというのだ。アグニスは、楽しそうに笑いつづけている。ドーラは、アグニスが大好きで、どうしても離れようといわない。いまでもかたく手を握っている。

朝食が出る。食べものも、飲みものも、きれいで、栄養のいいものが、どっさりある。私もお相伴をするが、ほかの夢の場合も同様で、味というものはちっともない。いうなれば、愛と結婚ばかり食べたり、飲んだりしているのであり、食べているものさえ、ほとんど本当とは思えないのである。

なにか私もしゃべったが、これもまた夢みたいで、なにを言おうとしているのか、自分でもさっぱりわからない。ただわかっていることは、いや、あれは決して言ったのではないという、そういう確信、それだけだった。だが、とにかくたいへん上機嫌で、すっかり幸福に酔っている。（もっとも、それもまた夢見心地ではあったが。）そしてジップまでが、ウェディン・ケーキを食べて、あとで気持ちが悪くなってもどしてしまう。

やがて雇っておいた駅馬が二頭きて、ドーラは、それで着がえにかえる。ミス・クラリッサと伯母とはあとに残り、みんなで庭を散歩する。伯母は、朝飯のとき、ドーラの伯母たちのことで、一席大演説を打つが、

ひどく上機嫌のようであるが、また、いささかその演説が得意でもある。

ドーラの支度ができる。ミス・ラヴィニアは、しきりに彼女のまわりを飛びまわっている。あんなにも楽しい仕事を与えてくれたこの可愛い玩具を、手離すに忍びないらしいのだ。ドーラが、いろんなちょっとした忘れものを、次々と思い出しては、驚きあわてる。と、みんなであわてて、八方へ飛んでは、それらを取りに行く。

いよいよ彼女が別れの挨拶をしだすと、みんないっせいに、まわりに集まってくる。色とりどりに鮮やかな衣裳やリボンで、まるで花園のような光景だ。ドーラは、ほとんど息もつけないほど、花の中に埋まるが、やっと泣き笑いしながら抜け出してきて、待ちかねている私の腕の中に飛びこんでくる。

ジップも一緒に行くはずだったので、私が抱いて行こうかというと、ドーラは、いえ、それは自分が抱いて行く。でないと、もう結婚してからは、可愛がってもらえないかと思い込み、がっかりするといけないから、というのである。さて、私たちは腕を組んで歩き出す。ドーラが、ふと足を停めてふりかえり、

「もしいままで、あたしに、わがままだったり、恩知らずだったりしたことがあればね、みなさん、どうか忘れてね！」と叫ぶ。そして、わっと急に泣き出すのだ。

もう一度、彼女は手を振って、私たちはふたたび歩き出す。が、また彼女は立ち止まって、ふりかえり、こんどはアグニスの傍へ駆けよって、特に最後のキスと別れの言葉を述べる。

やっと馬車が動き出して、私は、はじめて夢からさめる。やっぱり本当だったのだ！　私の隣には、あの可愛い、可愛い、こんなにも愛している妻がいる！

「ねえ、どう、幸福？　後悔しない？　お馬鹿さんねえ！」ドーラが小声で囁くのだった。

さて以上、私は一歩はなれて、あの幸福な日々の幻を追ってみた。それはもう、すべて消えた幻だ。ふたたび物語の旅を急ごう。

第四四章　新しい家庭

蜜月も過ぎ、花嫁づきの女たちも帰ってしまい、さ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton